2. 10. 30
佐倉市 教育センターだより Vol.52
令和2年10月30日発行／佐倉市教育センター／TEL. 043(486)2400 http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/13-6-0-0-0_6.html

ことばの力

佐倉市教育センター所長　榎　本　泰　之

昨年１０月に発生した台風１９号で、甚大な被害を受けた佐倉市ですが、同様に大きな被害を受けた福島県いわき市があります。市内各所で河川堤防の決壊、浸水被害や土砂災害等、多くの被害を受けました。そのような状況の中、グラウンドが浸水し、練習ができない間に、泥出し等のボランティアに励んだ野球部がありました。１９７１年夏の甲子園で全国準優勝を果たした福島県立磐城高校です。磐城高校野球部は日頃より地域の児童クラブを定期的に訪問し、ボール遊び等を通して交流を続ける等、地域からも愛される野球部です。１２年ぶりに秋季東北大会に出場し、公立高校で唯一８強入りした実力と野球を通して地域とともに歩む姿勢が評価され２１世紀枠での選抜出場が決まっていました。

しかし、コロナウイルス感染拡大の影響で選抜と夏の選手権の中止が決定し、甲子園出場の夢が絶たれました。くしくも東日本大震災と同じ３月１１日に選抜の中止が発表されたのは何か因縁に感じました。コロナ禍に巻き込まれる中、選抜の救済措置として、出場予定だった３２校を甲子園球場に招き、１試合限りの交流試合が行われることになりました。磐城高校もその１校となり、夢の甲子園球場で試合ができることになりました。また、制限付きではあるものの、夏の県大会の実施も決まり、７月２５日には３回戦を行いました。相手は２００１年に同じく２１世紀枠で選抜に出場した安積高校でした。結果は、第２シードの磐城高校が力の差を見せ、大差で勝利しました。両チームの戦いぶりで最も印象的だったのが、全力で試合に臨む姿勢やグラウンドでの立ち居振る舞いで、学生野球の本分を垣間見ることができました。両チームの普段からの野球に臨む姿勢が存分に発揮された素晴らしい試合となりました。試合後、勝利した磐城高校の校歌が響く中、安積高校のスタンドには「祝！！甲子園交流試合出場！！」の文字が掲げられ、敵味方の垣根を超えた温かなエールが送られました。そして、球場から出てきた安積高校の子どもたちへ、磐城高校の保護者や球場から自然と拍手が沸き起こり、球場全体が感動で包まれました。

安積高校は試合後に帰校して解散式を行い、保護者へ向けてことばを投げかける子どもたちの姿は感動的でした。それぞれの３年間の想いをことばにし、決して上手とは言えないものであっても、心がこもり、周囲を涙の渦に巻き込む素敵な時間となりました。そして、子どもたちと苦楽を共にしてきた顧問の先生からのことばは、子どもたちやその保護者にとって決して忘れることのできないものになったことでしょう。それは、濃密な時間を共に過ごした者だからこそ語れるもので、子どもたちも保護者も頑張ってきたことが報われた瞬間になったことと思います。３年間やり切った証を噛み締めるように語る先生のことばは、どれをとっても感慨深いものでした。子どもたちや保護者の目からは涙が溢れ、教師の子どもたちへ投げかけることばの大きさを実感した瞬間でもありました。

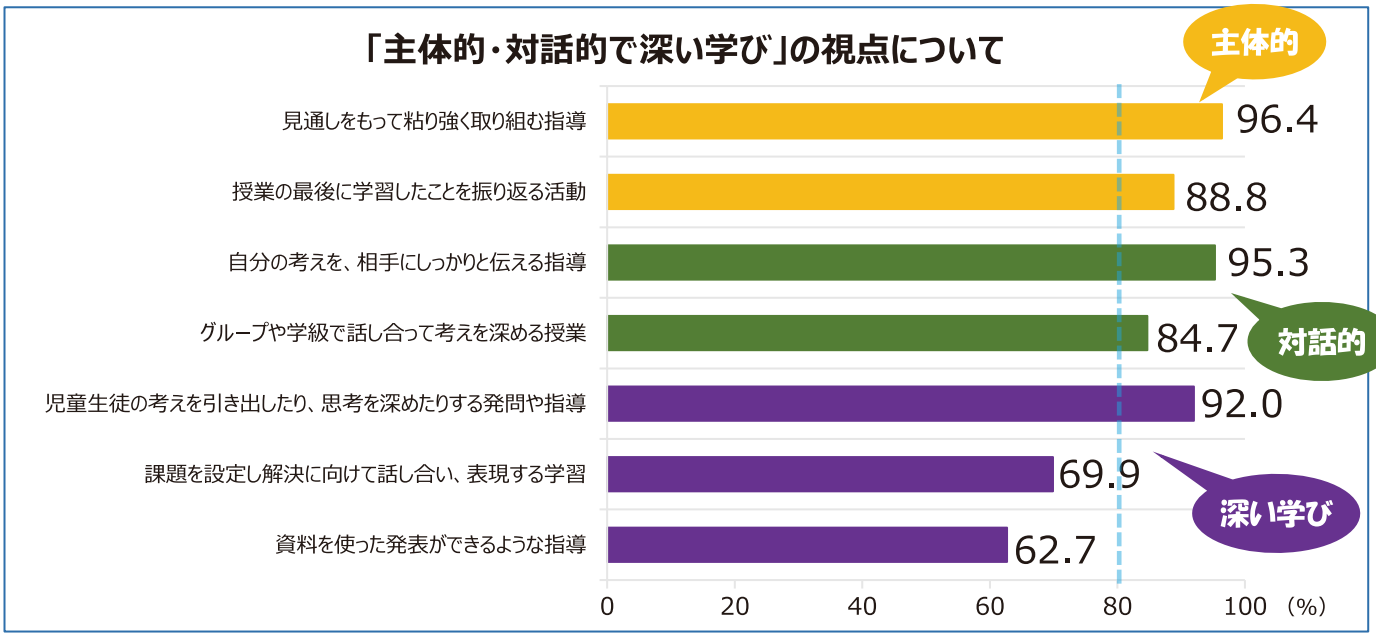
佐倉市内の先生方はこの特別な状況下の中、様々な対応を強いられ、日々苦悩しながら子どもたちと対峙していることと思います。市内小中学校の子どもたちもコロナ禍の中、多くの我慢を強いられ、特に小学６年生と中学３年生の気持ちを考えるとことばが見つかりません。そんな時、子どもたちに最も近い存在の先生方からのことばが、子どもたちの気持ちを前向きにし、次への大きなステップに導いていくに違いありません。昨年度小学校を卒業した佐倉市内の保護者が次のような話をしていました。「卒業式は在校生の参列もなく簡素化されたものでしたが、先生方にかけられたことばのひとつひとつがとても温かく、中学校で頑張る気持ちになりました。先生方の存在の大きさを改めて実感しました。」と。

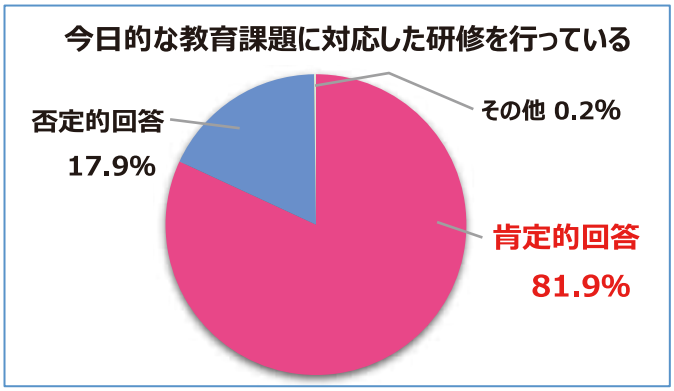
磐城高校は８月１５日の甲子園球場での試合で、強豪の国士舘高校に１点差で敗れ、高校生活最後の試合を終えました。試合終了後、顧問の先生からどんなことばがかけられたのでしょうか。我々教師が子どもたちに投げかけることばには多くの責任と重みがあります。コロナ禍で不安定な気持ちでいる子どもたちに３月まで、どのようなことばを投げかけ続けるのか。そのことばひとつひとつが、子どもたちの今後の心の成長を大きく左右することでしょう。このような大変な状況だからこそ、我々教師の力が問われるのだと思います。

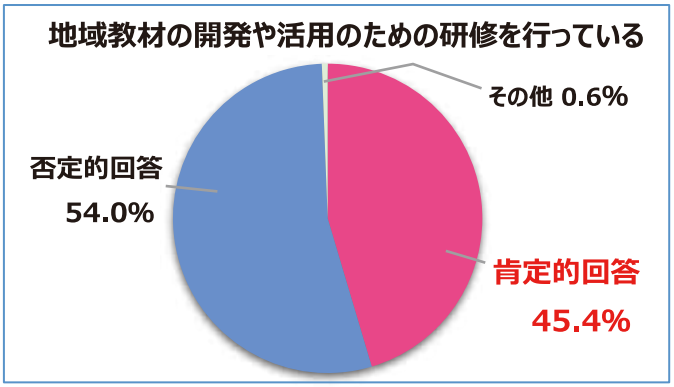
令和元年度　佐倉市学習状況調査 Part2

～子どもの「輝く」力の向上をめざした学力向上・学習内容の充実のために～

今回は、昨年度、市内小中学校の教諭、講師６４８名を対象とした４件法による学習意識等に関する調査からの考察です。以下の数値（%）は、肯定的回答をした教諭、講師の割合です。







小学校は本年度、中学校は来年度からの新学習指導要領の完全実施に伴い、多くの先生方が授業改善の視点を意識し、研修を進めていることが分かります。更なる充実のためのお薦め資料を下に掲載しました。どの資料もインターネットによる検索が可能です。

一方、児童・生徒自身に課題を設定させることや資料を使って発表をするような授業展開を意識していくことは難しかったようです。各教科の新学習指導要領への移行に合わせて、探求的な学習に取り組んでいく時間も充実させていけるとよいと思います。

各教科の内容を探求的に深めていくために地域教材を活用していくことも一つの方策です。佐倉には、佐倉の自然、歴史、文化、ゆかりの人物から学ぶ佐倉学があります。また、千葉県各地にも教科・領域と関連した素材が溢れています。各教科の学びと地域との関わりを探求的に見出していくことで、学びの有用性を高めることや、「ふるさと」について考える良い機会となるのではないでしょうか。

文部科学省「学習指導要領」各教科解説の第３章１（１）
・各教科における「主体的・対話的で深い学び」の具体的な内容が分かります。

国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」
・育成を目指す３つの資質・能力と３観点に変更した評価との関連性がよく分かります。

独立行政法人教職員支援機構（NITs）のホームページ
・新学習指導要領の各種解説や現代の教育課題が各20分程度にまとめられており、概要の理解に適したサイトです。

児童生徒が自己の変容に気づき、資質・能力を伸ばすための評価の在り方
（千葉県総合教育センターのホームページ＞調査・研究＞調査・研究報告書＞科学技術教育）
・メタ認知能力の育成と、資質・能力の向上を目指した資料の理論や活用事例がわかります。

佐倉市における言語発達に課題のある子どもへの指導の実態について

「通級指導教室」とは、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする子どもたちが、主として各教科等の指導は在籍の学級で行いつつ、障害による生活上又は学習上の困難を改善・克服し自立を図るための指導（いわゆる自立活動）を中心とした特別な指導を受ける場です。

佐倉市では、「ことばの教室」が通級指導教室として、市内５校8教室（佐倉小〈3教室〉、染井野小、白銀小、小竹小、南志津小〈2教室〉）に設置され、自校はもちろん、地域の学校からも通級し、言語に課題がある子どもたちが個々の課題に応じた指導を受けています。ことばの教室の指導の対象となる子どもたちは、構音障害（発音に誤りがある）、吃音（話すときにことばがつかえたり、つまったりする）、軽度のことばの発達の遅れ（週１、２回の指導で成果がみられるケース）などです。

佐倉市の実態

平成24年、中央教育審議会初等中等教育分科会で「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進（報告）」がまとめられ、その頃を機にことばの教室を利用する児童が増え始めました。さらに、平成28年には「障害者差別解消法」が施行され、学校での合理的配慮が義務づけられた時期に、ことばの教室の利用数も1.2倍に伸びています。その後も高い水準で人数を保っており、佐倉市でのことばの教室の需要が高いことがわかります。（図１）

図1　言語通級指導教室に通う児童数の変化

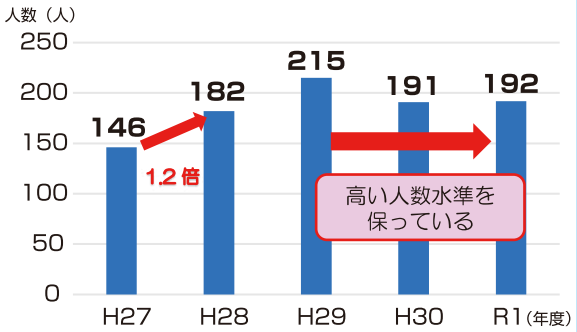
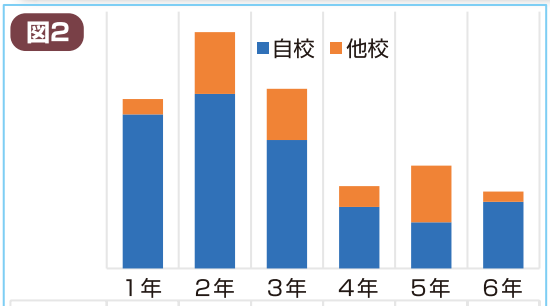


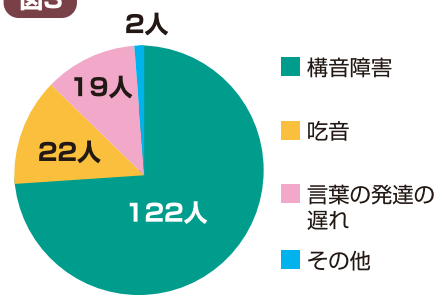
図2



	1年	2年	3年	4年	5年	6年
他校(人)	3	12	10	4	11	2
自校(人)	30	34	25	12	9	13

通級児童の該当学年（令和2年９月現在）

図3



通級児童の課題内訳（令和2年９月現在）

９月現在のことばの教室に通級する児童の学年別の数を見ると、下学年が全体の69%、上学年が31%と、学年が上がるに従い利用割合が減ることがわかります。また、小学校卒業を控えた6年生の通級も終了していき、利用が減少します。（図２）

内訳では、構音障害が最も多く、早期の指導ほど改善が見込まれます。（図３）

第３期千葉県教育振興基本計画の施策でも「早期からの教育相談と支援体制の充実」が述べられていることからも、早期の気づき、早期の支援により課題の改善克服に向け支援を行うことが大切だと考えます。

ことばの教室の成果と課題

指導により言葉の課題が改善し、在籍学級や、周りの人達に伝わるようになったと保護者から聞いた。

医療や専門機関と連携することにより、適切な支援を保護者と共に考えることができた。

保護者や在籍学級の担任との連携がうまくいき、より良い指導につなげることができた。

個別の教育支援計画作成や日課の調整等、在籍校との連携の難しさがある。

通級を希望する児童の増加のため、日程の調整が難しく、通級を始められないケースもある。

言語以外の困り感を抱えている児童について、課題の見極めが難しい場合があり、支援が十分にできない場合もある。

まとめ

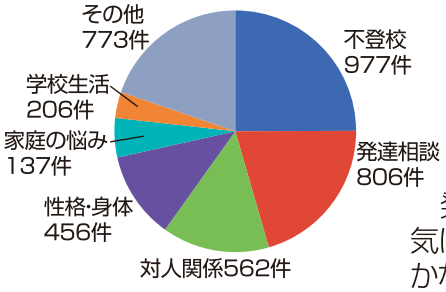
年々、ことばの教室への通級が増えており、時間数の確保や指導内容の充実について課題が挙げられています。一方で、ことばの課題の改善・克服により、友達との関係や生活そのものが改善されるケースもあります。また、継続した指導により、子ども自身が課題を自覚し克服していくこともあります。適切な支援を行うために個別の教育支援計画の共有など各学校及び関係機関、保護者が連携し、支援体制を充実させていくことが大切だと考えます。

教育センターにおける発達相談と発達検査

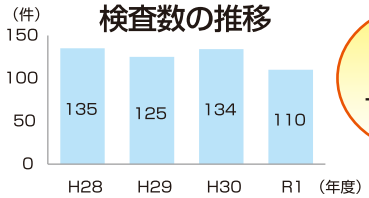
～子どもたちの「できた」を生み出す支援の工夫へ～

佐倉市教育センターに関わる相談は、毎年4000件ほどです。その中で今回注目するのは、発達相談です。割合は全体の2割ほどですが、他の相談とも密接に関わります。発達相談を勧めていく中で、発達検査を実施する場合が出てきます。

相談の内容（R1）



検査数の推移



検査数は毎年120件ほど

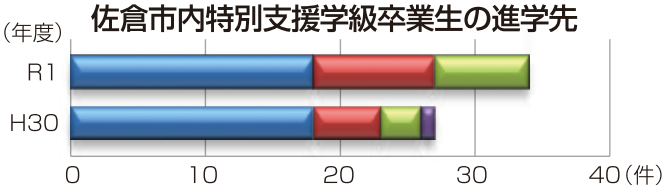
発達相談の中で、子どもたちの学習する力が気になったり、学習活動への取り組みが上手くいかなかったりした際に、発達検査を実施します。

検査の目的は…

- 特別な支援の必要性
- 関わり方のヒント
- 子どもの困り感

発達検査の結果から分かる、「特別な支援の必要性」をきっかけに、支援級への入級を考える場合があります。入級に際して、いくつか不安を抱く保護者もいます。

佐倉市内特別支援学級卒業生の進学先



	H30	R1
特別支援学校高等部	18	18
公立高校	5	9
私立高校	3	7
専門学校	1	0

保護者の不安の一つに高校進学があります。昨年度の佐倉市内中学校の支援学級の卒業生は、6割ほどが特別支援学校の高等部に進学していますが、4割は私立や公立の通常の高校に進学しています。

小学校の段階から中学校卒業後の進路を意識して、支援学級の学習で力をつけ、それぞれの希望の高校へ進学している子どもたちもいます。したがって、支援学級は「通常の高校に行けなくなる場」ではなく、むしろ「子どもたちにとっての選択肢を広げる場」ともいえると思います。

発達検査で何が分かる？

発達検査では、子どもたちの学習に対する「特徴」や「傾向」が分かります。

＜代表的なもの＞
- 言語の力（言われたことを正しく理解する力）
- 見たことを処理する力
- 頭に入った情報を頭の中で操作する力
- 素早く書き写したり形を選んだりする力

検査結果をどう活かすか

検査結果には、以上のことを考えるための、数多くのヒントが含まれています。保護者と結果を共有したら、ここからがスタートです。

特徴にあった支援の工夫

教室での提示の工夫
- 図やイラストで提示
- 簡潔な言葉で提示
- 動画の活用　など

教室での環境調整
- 座席の位置
- グループ編成の工夫
- 学習中に役割を与える　など

関わり方の工夫
- 特性に対する周囲の理解
- 個別の時間の確保
- 適確な賞賛　など

課題の量の調整
- 問題量の少ないプリント
- 書く練習の回数を減らす
- 奇数番号の問題だけを解く　など

結果から分かる特徴に合った支援を工夫し、小さな「できた」を積み上げて行くことが大切です。今、始められることから行い、少しずつ自信をつけて行くことで、「やる気」が回復します。そして、小さな「できた」は、保護者も元気にしていきます。その積み重ねが、プラスに進んでいく原動力なのです。